

## 研修成果報告書

### ■ はじめに

現代アートの島として知られる香川県香川郡直島町は、島の至る所にアート作品があり、アートによるまちづくりの代表的な事例である。今年は 3 年に一度開催される「瀬戸内国際芸術祭」の開催年であることから、アートツーリズムの現状を知る良い機会だと考え、直島町を研修先に選定した。

今回の研修では 8 月 1 日から 8 月 3 日の期間、アート・観光・移住に焦点を当てて調査を行った。本報告書では 3 日間の研修成果と、それを踏まえた自身の考察を述べる。

### ■ 研修内容

- ・聞き取り調査(NPO 法人直島町観光協会、民宿竹の家オーナー、島小屋オーナー)
- ・家プロジェクト見学
- ・地中美術館見学
- ・町内アート見学

### ■ 民宿オーナーへの聞き取り調査

はじめに私たちは民宿オーナーである松下竹男氏に話を伺った。松下氏は 40 年前に広島県から仕事の関係で移住し、定年退職後から 10 年以上民宿竹の家を営んでいる。自宅を民宿へとリノベーションする際、自身で壁紙を貼り変えたり、外国人観光客向けに洋室に畳を敷いたりしたと言っていたのが印象的だった。松下氏は多くの観光客が訪れる夏には民宿を開き、冬のオフシーズンにはスキーに出かけるのが楽しみであるそうだ。その話しぶりから民宿オーナーとしての仕事を非常に楽しんでいるように感じた。実際、私たちが滞在する中でも、宿泊客と積極的にコミュニケーションを取り、観光案内や車での送迎など宿泊客への心遣いが感じられた。

また、松下氏の話聞く中で直島町の地域性も明らかになった。直島町は観光が栄える前から仕事で町外の人が多く訪れていたため、町外に住む人、いわゆる「よそ者」が入ってくることに對して抵抗感を持つ人が少ないようである。つまり、直島町は小さな島でありながらも開かれた地域であると言える。

加えて、直島町には三菱マテリアルの製錬所があるため比較的裕福な暮らしをしている人が多く、心にもゆとりがあるそうだ。松下氏の言葉を借りると「ギスギスしていない」のが直島町の特徴である。そのため、株式会社ベネッセコーポレーション(以下「ベネッセ」)によって直島町にアートが持ち込まれた際にも目立った反発の声は上がらず、多くの人が抵抗なく受け入れたようである。

松下氏への聞き取りから、松下氏のようにおもてなしの心を持った地域住民の存在と余裕のある地域性が直島町の魅力の中心になっていると考察する。

#### ■ NPO 法人直島町観光協会への聞き取り調査

##### ・直島町と現代アート

研修 2 日目にエコタウンハウスなおしまにて NPO 法人直島町観光協会(以下「観光協会」)の藤井氏から話を伺った。直島町は香川県香川郡に属する離島の一つで、周囲 16km、人口約 3000 人の小さな島である。しかし、コロナ禍以前の 2016 年には 75 万人もの観光客が訪れるほど、国内外で人気の観光地でもある。その観光を支えているのが現代アートであるが、藤井氏によると、意外にも直島町はアートで町おこしをしたとは考えていないようだ。あくまでアートは口コミや SNS で徐々に評判が広まったことで注目されたものであり、プラスアルファで町に活気をもたらしものである。アートの中核を担うベネッセもアートについては派手なものではなく人と人との繋がりを生むものと捉えており、お金儲けを目的とはしていない。ベネッセグループの企業フィロソフィである「よく生きる」場を直島町に提供しているだけだそう。実際、ベネッセはアートの現場を日々見ており、地域に根ざすために住民からよく話を聞いて進めることを意識していたようである。企業と行政が協力し、住民の声を大切にしたらこそ町におけるアートの価値が向上し、アートが観光資源になるほどの評価を得られたのだと考える。

##### ・直島銭湯「I♡湯」の運営

観光協会は観光客からの問い合わせ対応や案内業務を中心とし、町営バスの運営や町役場から受託した業務まで幅広い業務を行っている。中でも観光協会が地域との協働として運営する直島銭湯「I♡湯(アイラブユ)」は実際に入浴できる美術施設として人気であり、お風呂に浸かりながらアートの世界を楽しめるのが魅力である。

直島銭湯「I♡湯」は町民を中心に運営されており、地域の人々と観光客の交流の場として機能している。実際に私たちが銭湯を利用した際にはスタッフの方が気さくに声をかけてくれ、夜のライトアップされた直島の楽しみ方を教えてくれた。また、観光客同士が「どこから来たの」、「今日はどこ回って来たの」などと会話をしている様子も見受けられた。

観光協会によると、町にアートが入ったことで高齢者が観光客と話す機会が増え、元気になったそう。さらにアートにより観光が栄え始めた当初は、自主的に観光客を送迎したり自宅のトイレを貸し出したりする町民も現れたそう。町民は観光客とのコミュニケーションを楽しむことができ、観光客は快適に観光することができる良い循環が生まれたようである。一方で、観光客の騒ぎ声や自転車マナー、ポイ捨てなどで町民から苦情が来ることもあり、観光客が増えたことによるマイナス面もあることがわかった。

#### ■ 島小屋オーナーへの聞き取り調査

続いて私たちはブックカフェ兼テントステイができるゲストハウスである島小屋を訪れた。築 120 年の古民家をリノベーションした店内は、古民家らしさとアートが融合した親しみやすい空間であった。リノベーションはオーナー自身の建築の知識を活かして行い、内装のデザインは知り合いのアーティストが手掛けたそうである。カフェにはフォーやプリン、クリームソーダなどのメニューがあり、SNS 映えを意識する若年層からも人気を集めている。また、店内には本や雑貨、駄菓子も並んでおり、地域交流の拠点となることを目指しているそうだ。

また、直島町への移住についても話を聞くことができた。オーナーは子どもが産まれたのを機に東京都から直島町へ移住したそうだ。直島町を移住先として選んだきっかけはオーナーが直島町を観光で訪れた際のある経験である。オーナーは地中美術館が完成した頃に直島を訪れたが、年末のため飲食店がほとんど休業しており困り果てていた。すると町民が声をかけてくれ、寿司を分けてくれたそうだ。その時の町民の優しさをずっと覚えており、地域の温かい関係性の中で子育てをしたいと考えていたオーナーは直島を生活の拠点として選んだそうだ。先述した松下氏の話にもあったが、直島町は住民に魅力があり、移住者や観光客を惹きつけていると言えるのではないかな。

#### ■ 研修の感想・考察

私は直島町は現代アートの島というイメージが強く、アートを中心とした地域づくりが町の魅力を創出していると考えていた。しかし、3 日間の研修を通してアートだけではなく町の人々に魅力があると強く感じた。民宿竹の家オーナーの松下氏や観光協会の藤井氏の話であったように、直島町の人々のおもてなしの心はこの 3 日間で十分に感じられた。このおもてなしの心の源は企業のそこに暮らす人々との十分な対話にあると考える。仮にベネッセが反対を押し切ってプロジェクトを推し進めていたら、これほど地域の協力は得られなかっただろう。また反対に行政の力だけでは、地中美術館や草間彌生氏のオブジェなど、洗練された現代アートを瀬戸内の小さな島に建てることは不可能だっただろう。まさに企業と行政、住民が対話の先に辿り着いたアートツーリズムの形である。これが苦境にあえぐ地方の観光地が目指すべき姿であるように感じた。

この報告書には記すことができなかったが、多くの町民の方々にアートの説明や滞在のサポートをして頂いた。この場を借りて御礼を申し上げたい。

#### ■ 参照

香川県人口移動調査 <https://www.pref.kagawa.lg.jp/tokei/jinko/jinkoido/index.html>